校長室の窓

令和７年１２月２２日
学校だより第９号より

～急がず、形づくられる～

１２月を迎え、身を切るような冷たい空気となりましたが、本校の子供たちは変わらず元気に過ごしています。休み時間には寒空の下を率先して駆け回り、授業時間が来れば気持ちを切り替えて学習に向かう姿に、日々の成長を感じています。

子供たちの頼もしい姿を目にするたび、私は、子供たちが築く「成長の土台」とは何か、ということを考えています。そのような折、子供たちの診療に携わる精神科医・村上伸治氏が、ルソーの『エミール』に触れながら教育について述べた文章を読む機会がありました。

ルソーは『社会契約論』で民主主義の理想を論じた思想家です。その一方『エミール』では、「子ども時代は、社会性や道徳を教え込むべきではない」と、常識とは真逆の主張をしています。ルソーは、１５歳頃までは子供を自分のことだけを考える自然人として育てるように説き、「言葉で道理を教えてはならない」「約束をさせてはならない」「謝らせてはならない」と述べています。これは、多くの大人が思わずぎょっとするような内容です。

村上氏は、現代は「自分の気持ちを表に出せないまま、周囲に合わせようとして苦しくなる子が多い」と指摘しています。その背景には、大人が“良い子”の型にはめようとする働き掛けが早過ぎたり、子供自身の気持ちよりも社会性を優先させようとし過ぎたりする状況があると言います。これは、土台が十分にできる前に大人が急いで形を整えようとすると、かえってその子が後で立ちゆかなくなる、と警鐘を鳴らしたルソーの考え方と合致しています。

本校の子供たちに目を向けると、安心できる環境の中で、自分の気持ちを言葉や行動で表現し、友達との協働も、誰かに押しつけられたものではなく、内発的な関わりとして積み上げている姿が見られます。これは、教職員だけでなく、保護者や地域の皆様が、子供が子供であることを理解し、温かいまなざしで受け止め、支えてくださっているからです。

私たちは、こうした環境を礎としながら、これからも子供たち一人ひとりに、自分の思いや気持ちを自分のペースで広げさせることを大切にしたいと考えます。時にはつまずき、悩み、失敗する経験も大いに味わい、その全てを糧として、子ども時代にしか築けない人生の基盤を形づくらせていきます。

今後も、子供一人ひとりの歩みに、焦らず丁寧に寄り添い、その子が本来もつ伸びる力、立ち直る力を信じながら、学校全体で支えてまいりますので、本校の教育活動へのご理解とご協力をお願い申し上げます。